

* 東京天文台クラブ「プラターヌ」1号～1990年3月23日号

アーカイブ室新聞番外編第3号に「東京天文台クラブ新聞「プラターヌ」22号(昭和41年6月号)(2008年10月2日)」という記事を書いた。国立天文台の前身の一部は「東京天文台」といった。東京天文台には職員全員がメンバーであった「東京天文台クラブ」という組織があり、職員の親睦をはかることを目的としていた。その東京天文台クラブの機関紙が「プラターヌ」という新聞であった。アーカイブ室新聞番外編3号に昭和41年6月に発行された22号を取り上げた。この号には特集として「新会員紹介」があった。紹介されたのは昭和41年4月の移動で新しく入ってきた職員の紹介であり、ひげのオジさん：下村潤二郎(事務部：事務長)、巨人か酒か：海老沢朝夫(事務部：用務員)、うちのとうちゃんは・・・：田代とよ(事務部：用務員)、釣哲学者：橋本勇(事務部：用務員)、声はすれども：園田和子(事務部：電話交換手)、“駅前”と“クレージー”：坂根薫(事務部：事務補佐員)、泳げば2Km：岡田聡(計算施設：技官)、電子計算機と共にやって来た：豊国義明(計算施設：沖電気駐在員)、読めますか?：惣滑谷基(天体掃索部：教務技官)、東側のトイレ番：西野洋平(天体掃索部：技官)、麻雀の強化合宿：川尻轟大(天体電波部：助手)、バス停のツル：飛田恭子(測光部：技官)、蝶を集めて何百種：宮下暁彦(測光部：技官)、等身大の吉永小百合：中桐正夫(分光部：技官)、歌謡少年：宮下正邦(太陽物理部：技官)が編集記者の独断と偏見の語り口で書かれていた。そしていろいろな記事、広告があった。これらの記事を見て、当時の天文台の世相、社会の世情をよく現しているという評価があった。

そこで筆者は「プラターヌ」は創刊号からアーカイブしておく価値のあるものと、プラターヌが発行され始めたのはいつか、いつまで続いたのかの探索を始めた。筆者の記憶では定期刊行物ではなかったが、かなりの頻度で発行されていたと記憶していた。しかし、天文台の公的発行物ではないし、発行され始めたのも古くとくに退職された方々が係ったものであったから、物持ちがよさそうな方々に手紙を書いたが、既に処分されていた方が多く収集は無理かと思い始めていた。ところが筆者としては一番処分しそうだと思っていた方がNo.1から最後の号らしいものまで、ある人物から託されて保管されていた。木下宙氏であった。No.1は1960年5月15日発行であった。この時代、昭和の年号が使われていないことが当時の編集者のある面を表しているのだろう。No.1を発行した東京天文台クラブ委員長は天文時部の飯島重孝氏である。氏は当時、講師であられたと思う。常任委員は飯島氏のほか、安田春雄、杉崎恒夫、代情靖、下保茂の各氏である。

アーカイブ室新聞番外編第5号に「東京天文台クラブ「塔影」をデジタルアーカイブ(2008年11月6日)」という記事を書いた。この「塔影」は1950年秋が創刊号であり、毎年1

号が発刊され、1953年11月に4号が発刊されている。この4号で終わったかどうかは現在のところ定かではない。「塔影」編集の中心にいた方が4号までしかもっていなかったことから、そこで途絶えたのだと思っているが追跡調査はして見る。

「塔影」は東京天文台クラブが発行したが、それは文芸同人誌であり、明らかに「プラターヌ」とは趣が異なっていた。「プラターヌ」は明らかに現在の国立天文台ニュースの「当時版」と言えるものであった。それでは「プラターヌ」はいつまで発行されたのだろうか。昭和46年1月4日に37号-2というのがNo.のついた最後のようであり、その後、昭和61年3月31日付けの「退職者記念文集」、1990年3月23日付けのやはり退職者記念文集のような号までが筆者が収集できた「プラターヌ」全号である。プラターヌは1960年(昭和35年)～1971年(昭和46年)までは継続的に発行されたが、その後はどうなったのであろうか。その後の号が2つ発見されたが既にナンバー付けはされていなかった。発見された最後の1990年3月に発行された号には国立天文台クラブとなっており、東京天文台は既に国立天文台に改組転換されており、「国立天文台台内広報」なるものが隔月で1988年8月から発行されるようになり、またそれとは別に「国立天文台ニュース」が1988年8月から隔月に発行されるようになった。そして1997年4月1日付けの53号から毎月発行になって現在に至っている。現在では退職者の挨拶が国立天文台ニュースの2～3月号あたりに掲載される。当時の「プラターヌ」は現在の国立天文台ニュースの役割を担っていたことになる。創刊号を見れば、台員の移動という項があり、新入台員、退職者、台内移動、おめでた、御不幸があり、各部の活動報告がある。現在の国立天文台野球部はこの秋、2冠(在京大学等職員懇親野球大会(在京)および西東京地区共済野球大会(西東京)の両大会優勝)を達成した。その記事が国立天文台ニュースに掲載される予定だ。まさしく国立天文台ニュースはある面では「プラターヌ」を引き継いでいるともいえる。

これまで「プラターヌ」、「塔影」に関する記事は番外号で書いたが、今回はこれらについて調べ、それが国立天文台ニュースに繋がっていき、これらは現在の国立天文台ニュースに相当する面が大きいことが分かった。「プラターヌ」は任意団体であった東京天文台クラブの機関紙としての立場であり、公的な出版物ではなかったが、歴史的価値は国立天文台ニュースと変わるところはない。今回は発見された「プラターヌ」全てのデジタルアーカイブの報告であるから、今号は番外にする必要が無いと思う。今まで番外編は天文台の歴史の公的な面でないものを扱ったものであった。「プラターヌ」は天文台の歴史を語る公的な要素が大きい。アーカイブ室のデジタルデータとしたので興味のある方はどうぞご利用いただきたい。

図1は創刊号、図2は昭和61年3月31日号、図3は1990年3月23日号である。現在収集できたものは創刊号(1960年5月15日発行号)からNo.の付いた最後の号である37-2号(昭和46年1月4日号)と昭和61年3月31日号、1990年3月23日号が全てである。

これで発行された「プラターヌ」を全て収集できたかどうか、まだ分からない。このアーカイブ室新聞104号が多くの人々の眼に止まり、情報が集まる事をねがっている。

